子規俳句潺潺 8

――明治三十一・二年

宮坂敏夫

夏休み来(く)るべく君を待(まち)まうけ　明治31年

『俳句稿』（明治三十一年）所収。夏、人事に出る。「瀾水死にぬとの噂あり」と前書がある。新聞「日本」（明治31・8・11）には、「瀾水の音信しばらく絶えて夏休みにも上り来らず仙台にみまかりしやらんとある人の話しは果して信か」と長い一文が付き、掲出句が載る。中七「来(く)るべく」はあるいは「来(また)るべく」と文語調の読みをとった方が一句にはふさわしいかとも判断されるが、中八音の字余りにせず、定型の読みにしたがった。

夏休みになった。早速来てもいいはずの君が来ない、どうしたのだろうかと気遣いながら、君を待っているとの意。

若尾瀾水が虚子に伴われて根岸を訪ねたのは、前年三十年（一八九七）の暮春であった。京都の第三高等学校を退き、仙台の第二高等学校へ、大学予科転入試験を受けるため赴く途中、東京で虚子、碧梧桐と会い、病臥中の子規に見(まみ)える。虚子とは、一年前、京都知恩院門前の広場で開かれた京阪俳友満月会という日本派の俳人の集まりで会っていた。が、昵懇(じっこん)ではなかったので、同じ三高法科にいた寒川鼠骨から紹介状を貰い、携えたのである。

初対面の子規の印象をのちに瀾水は次のように記している。

「子規先生は臥辱中ではあったが、この時はまだ元気で客を迎へ上半身を起き上がらせてお話があった。時々唾液がたまるので枕頭の痰壺を引き寄せ手づから蓋を取って吐き出されたりした。私に対して二三お言葉をかけられもしたが、あとは虚子君と打ち寛いだ対話に終始したが、病苦を慰められたものの如く眉目も晴々しく見えた。先生は初対面の私には極めて口数が少なかったが、その印象は何時までも忘れない。お顔は面長で鼻筋が通って居た、鼻翼が薄く頬の肉が平ったくて鼻の穴がポッカリあいて居た、瘠せて居る為であろうが唇は血色が薄かったが、歯並びがよく真ッ白であった、そして眼が美はしい、この二つが先生の容貌を気高くして居るのだと思った。」（「春あはたゞし」、「みどり」第三二〇号、昭34・6）

瀾水自らいうように、初対面の子規に印象深かったのである。この点は、青年好きの子規にとっても、同様であったと思われる。

『若尾瀾水俳論集』（若尾瀾水遺稿編集委員会編、高知市民図書館刊、昭42・10）付の年譜によると、同年春、子規庵句会にも出席とあるが、残存する句会稿は七月十八日、漱石も交えた臨時小句会に瀾水の名が出る。

六月、二高の転入試験に合格し、仙台に移った瀾水を囲み、「東北日報」記者佐藤紅緑をはじめ近藤泥牛、野田九江、木村岐山、戸沢古鐸ら奥羽百文会の仲間が五城館で歓迎会を開いてくれる。百文会は仙台の新派の句会。同年一月十一日発足したばかりであった。名付のいわれは、維新の時、勝ち誇った官軍が、奥羽地方を嘲って奥羽一山百文と、その人物がいないことを揶揄したことを踏まえ、自謙の意味だといわれる。在仙一年程で去る紅緑の後を継いで、間もなく百文会をやらざるを得なくなる瀾水であるが、子規と会う機会は、この年の夏休みの根岸庵例会で、しばしば実現した。瀾水は、上京し、神田の国民英学会の講習を受ける傍ら句会に出席した。

七月十八日、八月七日、二十二日、九月四日の四回である。子規自ら、本郷区元町の下宿先へ葉書を寄せ誘った。

瀾水の一句を八月二十二日の第一回運座では、漱石、墨水が天、子規が秀逸、他に碧梧桐、露月が抜き、評判になったこともある。

水難の茄子畠や秋の風　瀾水

九月に入ると、新学年が始まり、東京を後にすることになるが、この一夏の根岸庵の印象は、青年の目に焼き付いたのであった。

「私は此目で後年日本文壇の覇者となりて一世を風靡した小柄な漱石先生が、先生の病臥して居らるゝ布団の上に胡座をかき、中よしの子供がするように鬚面を引つ付け合わさんばかりに摩り寄せて欣々として並らばれて居たのを見た。」（「子規先生と漱石先生」、「千鳥」第三九巻、昭32・2）

仲がよい、信頼し合っているといっても、子規、漱石の間ほど熱烈なものはないと純真な瀾水には思われ、それは日本派の結束の固さを象徴するものであるようにも受けとれた。が、間もなく、瀾水の属した奥羽百文会にとり、まずいことが起った。

子規を校閲者として上原三川、直野碧玲瓏が日本派の初の選句集『新俳句』の編纂をすすめているさなか、三十年十一月十五日に、東京の白鷗社から近藤泥牛（鬚男）編により、『新派俳家句集』と大々的に名を付けた選句集が子規に相談もなしに出されたことである。それは、新派とは名ばかりで、新派も旧派もない雑然たる寄せ集めで、子規は見るなり、激怒した。日本派俳人や秋声会等の短冊を口絵に掲げた個所は、後刷（明36・1・5）では削除されたが、編集や出版の過程が不明瞭で、子規には到底日本派を中心とした新派の句集とは認めがたい、たしかな俳句観が感じられないものであった。

瀾水が参加した、夏休み最後の九月四日の根岸庵句会には紅緑も鬚男も加わっていた。句会に参加するのは自由であるが、二人の参加は、後になって顧ると、『新俳句』編纂の進み具合をさぐるという句会とは別の意図をかんぐられるような面があった。

これは、後になり諸事情を知った上での見方と推測されるが、瀾水は、このときのことを、次のように書いている。

「佐藤紅緑、近藤鬚男の出席し居たるは意外であった。私は紅緑は少なくとも河北新報（明治三十年一月創刊、紅緑入社）を書いて居ると信じて居た。人の隠微を発くことは出来ぬが紅緑と河北新報とは已に緑薄くなり、紅緑と鬚男とはコンビにて東京に乗込み、新派名流俳句集の発行に躍起となって居たのではなからうか。だが一呑みにし

て根岸庵の空気強硬にして形勢非なりと見て、機敏な彼は一切を見切り逸早く帰仙せしものでなからうか、私が九月下旬仙台の彼の寓居を訪いし時は欣々として、何の事もなかりし如く迎えて呉れ句作を共にした。」（上掲「子規先生と漱石先生」）

仙台に帰り、奥羽百文会の新進として、紅緑や鬚男と交わらざるを得ない瀾水にとり、東京の子規との音信が間遠になるのは、いたし方ないことであった。

翌三十一年四月、瀾水は、「四肢倦怠口舌麻痺して食味を感ぜざる」（「奥羽百文会」逝稿『俳諧誨』）という重篤な脚気症に罹る。句仲間の戸沢古鐸（医学部）が県立病院に入院手続をし、介抱してくれた。衝心寸前の徴候を呈していたとのことであった。

退院は六月末となる。下剤をかけるのみで特段の医療手段がない脚気の治療は長びくのであった。その上、瀾水にとり、不幸が重なった。六月十二日に郷里、高知県吾川郡弘岡下ノ村（現春野村）にいた父仲五郎が感冒から肺炎をひき起し亡くなってしまった。母姉が病中なるを慮り、秘していたので、退院後、夏休みに郷里に帰り知ったのである。七、八月の両月は仏事供養や遺産整理、相続手続におわれ、なお、ひどい熱病にとりつかれ苦しんでいる。仙台へ向ったのは十月に入ってからだった。

さて、長々と瀾水に関し記したが、掲出句で子規が「待まうけ」させられた、瀾水側の事情は以上の通りである。一年前の初対面以来、いまだ世馴れない、うぶな、四国の富裕なお坊ちゃん息子瀾水に子規は好意をいだいていた。今年の夏休みにも、当然やって来て、運座をともにすることができるとひそかに期待していたのである。

このときの子規は、紅緑や鬚男にいだいた不信感を瀾水にはもっていない。子規は理路整然と考えられる男であった。しかし瀾水への心配は、紅緑や鬚男と交流せざるを得ない立場に置かれていることを知るだけに、単純ではなかったと思われる。

その後、子規と瀾水との関係はわるくはなかった。瀾水はよく百文会をまとめ、日本派句会として、三十三年（一九〇〇）には、会員数四十名を越える盛況である。祖父丈六米寿の祝句、「瀾水君高嗚」

柿の花八十八をいはひけり　子規

右の高吟をもらったのも同じ年の夏。

同年七月には、第二高等学校大学予科法科を卒業し、九月には東京帝国大学法科大学政治学科に入学している。早速、子規庵の文章会「山会」にも出席することになる。翌三十四年（一九〇一）子規選『春夏秋冬』春之部（5・25、俳書堂刊）には、二十二句が入集。

三十五年（一九〇二）三月には埼玉県から創刊された日本派のグループ誌「アラレ」（稲青、三允ら）の選者に推されている。子規は同年九月十九日死去。翌月十月、突然、但馬の俳誌「木蒐」第二巻九号（由利由人主宰）の子規追悼号に瀾水は「子規子の死」を発表した。

そこでは、人間は完全ではなく、「尊崇する同一の人は、又幾多の凶徳の持主なるを怪しまず」という人間観から、子規の透徹な頭脳と旺盛な精力によるかくされた裏面を縷々とあばき出すのである。子規の性格の凶徳仲、もっとも不快なのは、冷血なることで、子規

の話題は、心身攻撃、他人の失策話、愚行などを冷評し、愉快がる。自分は偏狭なるにもかかわらず、衒学じみ、独りおのれを高しとする。さらに、このような子規のとりまきには、ひたすら足下に跪拝する無智なる「お難有連」と、子規の名を吹聴することにより自身に箔をつけたがる「お菰連」とがいるという。

片言の紹介では不十分であるが、瀾水は、右のような痛烈なる子規と子規派への批判によって、明治の俳壇から離れることになる。子規の期待に、瀾水は予期しない形で応答したひとりであった。

ある僧の月も待たずに帰りけり　明治31年

『俳句稿』（明治三十一年）所収。秋、天文に出る。初出は、新聞「日本」（明治31・10・6）。「立待月」と題し載る連作中の一句である。子規は、この時、百句作り、掲載紙の都合から、掲出句を含む前半五十句、つゞいて後半五十句が両日にわたり発表された。その全体の前書が、作句の状況の大略をうかがわせる。

「陰暦八月十七夜、月を上野元光院に看る。会する者二十人、筑前琵琶を聴く。俳句百首（ママ）を以て記事に代ふ。」とある。

陰暦八月十七日は、陽暦では十月二日。陸羯南の主催で開かれた上野寛永寺の塔頭元光院の月見の宴には、新聞記者、政治家、学者、文士などが集まった。子規は病を押して加わっている。九月十六日、中村不折宅へ雁来紅を見に出かけて以来、半月ぶりの外出であった。

このような機会は、二度とめぐまれまいと、子規は思ったにちがいない。元光院の佇まいを詠んだ精舎十句の他は、時間の経過にしたがい、準備、始夕、待月、月出、卓上、雑談、琵琶、囲碁、人散などに分けて、それぞれ十句、合わせて百句作っている。

内藤鳴雪宛の手紙に、「私イヨイヨ俳想涸渇全ク浮ヒ不申候」（同年八月四日）といゝ、一句作るのに三十分、一時間とかかると嘆いた、二か月前の弱音が嘘のように、このときの子規の意気込みは格別であった。

芋を煮、枝豆を茹で、初茸をこしらえる。ランプを置いた卓上には、柿、栗のほか、名物の芋阪の串団子も用意され、般若湯も土瓶につけられている。

立待月の出を、文字通り、庭前の松陰に立って待つ五六人の話し声がきこえる。他方、根岸から三河島あたりの夕闇を見つめる者、月見よりも早々と、囲碁に夢中になっている仲間など、月を待つ容子はさまざまである。

そのとき、すっと立ち、座を抜けていく、ひとりの僧があった。急に用事でも思い立ったのであろうか、真近い月の出も待たずに帰って行った。

ある僧と、朧化法を用い、固有名詞を伏せたいい方をしているが、釈清潭（しゃくせいたん）という寛永寺塔頭浄名院の青年僧である。このとき二十八歳。子規庵へは、陸羯南を訪ねる序（つい）でに、立ち寄っており、子規とは顔見知りであった。「ある僧」といういい方に、ここでは旧知の仲がしのばれる。「月も待たずに」、見ないで帰ったことが、かえって印象深く思われたのであろう。

釈清潭の「正岡子規」（『狐禅狸詩』丙午出版社、大正2・8刊）によると、

子規は、

アル僧ノ月ヲ観ズシテ帰リケリ

右の一句を清潭に贈っている。掲出句と比べると、掲出句に、ものに拘泥しない清廉な人物像がうかぶ。後掲の一句、「月ヲ観ズシテ」はいささか屈折したいい方であり、清廉さよりも、一抹の捻くれた感じが気になる。推敲した掲出句の句形がすぐれていよう。

釈清潭は、本名小見清潭。大獅子吼林と号した。漢詩人でもあり、後に東洋大学教授として、作詩法を講じた。林古渓との共編著『作詩関門』は名高い。子規は後年、

清潭が棲ム山寒シ獅子ノ声　明35

右の句を贈っている。ただし、新聞「日本」(明治35・2・26)には「憶清潭」と前書が付き、次のような句が出る。

清潭の居る山寒し獅子の声　明35

さて、掲出句の他に、「立待月」一連の作からは、こんな句に注目した。

秋の蚊や墓場に近き寺の庫裏
テーブルを庭に据ゑたり草の花
向きあふて淋しき顔や秋の暮
闇百里ぽつちり赤き月の端
人しばし月に余念もなかりけり
芋阪の団子の起り尋ねけり
やゝ寒み文彦先生髯まだら
卓上や狼藉として豆のから
月さすや碁をうつ人のうしろ迄
琵琶聴くや芋をくふたる臾もせず　明治31年

『俳句稿』(明治三十一年)所収。秋、草に出る。初出は新聞「日本」(明治31・10・7)に「立待月」と題し載る。そこでは下五が「顔もせず」とある。上野元光院観月会で筑前琵琶を聴いた、その折の作である。芋が三秋の季語。芋は里芋、名月には欠かせないもの。芋名月といえば、陰暦八月十五夜の月の異名にもなっている。皮をつけたまゝ茹でた里芋、衣被(きぬかつぎ)を十五個、三方(さんぼう)に載せ、月に供える風習がある。元光院での観月会は十月二日(陰暦八月十七日)であるが、主催者の陸羯南により、芋、栗、柿さらに、名物芋阪の串団子も十分に用意されていた。

しばらく、それらを饗応に与るざわめきがあった。そして、お目当ての筑前琵琶を聴く。

掲出句は、流麗な音調の筑前琵琶を聴いた昂ぶりを朴訥に表現したもの。上五と「芋をくふたる臾」との対比におかしさがある。

琵琶には、薩摩琵琶と筑前琵琶の二種類がある。筑前博多の橘智定(旭翁)が、古くからの薩摩琵琶と三味線楽とを合して創めた弾奏法なので、筑前琵琶という。そのように名付けられたのが、丁度、この年なのである。巧緻をきわめた華麗な音色が評判となり、男性ばかりでなく、婦女子の間にも流行することとなるが、主催者羯南は、いち早く、筑前琵琶をひろめる一翼を担ったわけである。当然、そんな紹介もあったにちがいない。

「琵琶聴くや」という上五には、子規が琵琶の音の虜(とりこ)になっていくさまがうかがえる。先程まで芋を食い、世間話などに興じていたその変わりように自分自身驚いている。

秋風や通りかゝりし一の谷　　明治31年

『俳句稿』(明治三十一年)所収。秋、天文に出る。「午後四時」と前書がある。特別な意味があるのではなく、臨場感をかもし出すため、適当な時刻を設定したもの。この年、子規はしばしば、そんな前書をつけた作を残している。午後四時は、日没近い時刻である。

一の谷は神戸市須磨区西方の地名。源平の古戦場として名高く、義経が奇襲により平家を敗走させた鵯越(ひよどりごえ)は、鉄拐(てつかい)山の北にある。安徳天皇の内裏跡も敦盛の墓所もこの地。

三秋の季語秋風と地名一の谷との配合がかもし出す淡泊な味わい。その上、「通りかゝりし」という中七の措辞がいっそう淡泊さを増長する。日没近ければ、尚さらである。

さりげない一句ながら、捨てがたい味がある。

穂の黒き砂地の麦や汐曇　　明治31年

『俳句稿』(明治三十一年)所収。夏、草に出る。新聞「日本」(明治33・6・25)にも「麦」と題し載る。

麦の穂が黒くなるのは、黒穂(くろぼ)病に罹ったもの。裸黒穂病菌が付くと、穂が黒い粉(胞子)を生じる。消毒をしない、この頃の麦畑は、黒穂が出ると抜く以外に伝染をふせぎようがない。ましてや、海近い砂地につくられた麦畑である。里穂が出てもそのまゝに放ってある。沖へ展ける空は、潮がさす水気のために、どろんと曇っている。

灰色の空と麦の黒穂。変わりばえしない場景であるが、私は、「汐曇」の一語に注目した。この語は中世の歌合や謡曲にしばしば用いられたことば。たとえば、こんな用例。

潮曇りにかき紛れて、跡も見えずなりにけり(謡曲「融」)

掲出句も下五の「汐曇」という謡曲調のことばの格調によって、一幅の墨絵にひき上げられたのである。

水草の花の白さよ宵の雨　　明治31年

『俳句稿』(明治三十一年)所収。夏、草に出る。新聞「日本」(明治33・7・28)に「水草の花」と題し載る。『春夏秋冬』夏之部(碧梧桐・虚子共編)、植物に、「水草花(みずくさのはな)」として入る。

初出は、三十一年十一月「草十句集」である。四季を問わず、草を詠み込んだ句を十句つくり、二十四時間以内に次の回送者にまわすというもの。蕪村の『新花摘』によって示された一題十句の試みを早速とり入れたもので、明治二十九年四月「畑」十句以来、草十句は三十二回目の月次十句集にあたる。

「水草の花」は、河骨(こうほね)や沢瀉(おもだか)のような水草の花の総称。古く連歌時代から夏五月のものであったが、俳諧歳時記『改正月令博物筌』(文化5)には三夏の季語として出る。

日が暮れ、まわりは暗くなってしまったが、池の面に水草の花だけは白く、ぼおっと浮かんでいる。折から、ポツポツと雨が降りだ

した。

句意はおゝよそ、こんなところである。子規の想像句か嘱目吟か、どちらでもよい。たそがれから夜への境、宵というみじかい時間設定の上に、雨の中の水草の花の白さが、点景として描かれる。

これ以上、淡い場景は他にないであろう。下五にどんな語を配すか、着地のことばによって一句は決まる。決め手にあたるところ。

子規は、静謐な、さりげない語をもってくる。そこに特徴がある。「宵の雨」は、そのいい例にあたる。

水草の花の句は子規に九句あるだけであるが、河骨が13、萍が31、藻の花が33と、なぜ水草のような弱々しい素材を好んで用いたのか。子規の俳論の明快さに比べて、俳句は、淡泊なのである。水草のような素材が好まれたのも、子規が俳句の淡泊さをだいじに考えたからにちがいない。当然、病者という境遇も、さらに関わっていたであろう。

祇園会や二階に顔のうづ高き　明治31年

『俳句稿』（明治三十一年）所収。夏、人事に出る。初出は「ほとゝぎす」第十八号（明治31・6）募集俳句「二階（夏季結）」石井露月選。そこでは、皿山という雅号を用いている。同じ号の募集句の選者は、他に子規が「庭（夏季結）」、虚子が「門（夏季結）」を担当しているが、子規は虚子選にも皿山の号で投句している。なぜ、こんな別号を用い、投句しているのか。投句者を一人でもふやしたいという配慮からであろう。

露月選は四等から一等までに分けられ、その上に天、地、人が出る。掲出句は、次の句とともに、一等二十五句中に選ばれている。

凌霄や出湯の宿の裏二階　皿山

季語は祇園会。晩夏の行事である。祇園会はもと祇園御霊会といゝ、疫病をもたらす霊を鎮めるために行なったもの。七月一日から三十一日まで一か月にわたるが、とくに、十七日の神幸祭から二十四日の還幸祭までが祭のクライマックスである。

神幸祭の日は、鉾祭ともいゝ、山鉾山車が八坂神社から四条通を通り、東洞院の西のお旅所へ巡行する。還幸祭の日には、神輿がふたたび八坂神社へもどる。花傘巡業、後の祭が絢爛とくりひろげられる。

「二階に顔のうづ高き」とは、二階の窓から身をのり出して祭見物をする顔の多いことをいう。ことに、「うづ高き」の量感の表現が効いている。顔が重なり、犇めいているさま。山鉾山車の巡行などを見ようと、通に面した二階家は、どの家も顔が重なり合って、ぎっしりだというのである。

二階の語を夏の季語と付けるという観念的な映像操作の句で、嘱目吟ではない。が、祇園会の町家のさまが浮び出て、印象深い。

祇園会や眞葛か原の風薫る　蕪村

右の蕪村の句は、町中をさけたところの真葛原風景。それに対し、子規の掲出句は、祇園会の中心地での祭見物のさまを描いている。省略の効いた、臨場感のある句である。

草の雨燈籠さげて通りけり　明治31年

『俳句稿』（明治三十一年）所収。秋、人事に出る。初出は月次十句「草十句集」（明治31・11）による。草を詠み込んだ題詠。のちに新聞「日本」（明治33・11・6）に「燈籠」と題し載る。

「草の雨」は、草に降る雨。これだけでは季語にならない。「燈籠」は広義の盆燈籠のこと。晩秋の季語である。燈籠さげてというから、当然、灯している。掲出句は、どんな場景であろうか。盆行事は、ところによりさまざまであるが、私は十三日の迎火の一夕を思い描く。

先祖の墓に詣で、墓の口で迎火を焚き、燈籠の明りで、精霊を伴ない、門口まで来る。ていねいな家では、さらに戸口で迎火を焚く。しずかに草に降る雨の中、精霊迎えの燈籠を灯して通ったことよの意。

燈籠は流燈会に向う燈籠と受けとれないこともないが、草の雨の中を、燈籠さげてと、灯しゆく燈籠の、ある時間の長さを暗示する表現は、流燈会にはふさわしくないであろう。

「草の雨」と置いた、淡泊で、しかも、しんみりした味わいはまさに子規の特色である。

長き夜の障子の外をともし行く　明治31年

『俳句稿』（明治三十一年）所収。秋、時候に出る。新聞「日本」（明治33・9・21）に「長夜」と題し載る。長き夜が三秋の季語。たゞし、秋も深まった晩秋の気配が濃い。

物音ひとつしない秋の夜長、ひとりぽつねんと、ひと恋しい思いを抱いて起きていると、障子にぽっと灯影がさし、外の廊下を手燭をともしてゆく者がある。句意をとれば、きわめて単純であるが、作者子規の境遇を一句に投影すると、おのずから陰影の隈どりが施されよう。

病臥の身にとって、秋の夜長ほどつらい時はない。この家に、あたかも時間が停まってしまったかのようだ。だが、どんなに気が焦っても、母や妹を用もないのに呼びつけるわけにはいかない。このような閑けさの中で、ふたりはなにをしているのであろうか。ふと、そんな折に、ひとの動く気配がする。灯影を障子におとして、なにか物をとりに立ったのか、厠へでも行ったのか。

虚子は、下十二音に関し、次のようにいっている。

「常に種々雑多の出来事のある家庭であったり、又陽気な春や夏の時候であったりすれば何の感興も惹かないのであるが、寂莫（ママ）たる病室外のことであって見ると、其些細な出来事が非常に大きな出来事の如く受取れたのである。」（『子規句集講義』第一回）

些細な出来事が、大きな出来事のように感じられるのも、「長き夜」の無聊さからだ。子規には、夜長の句が九十七句ある。そのうち、上五に「長き夜や」と置いた句が二十三句。いかに子規が、長き夜に拘泥しつゞけたかが知られよう。病者子規にとっては、長き夜の時間の延長に日常の生があった。ということは、夜長の辛さ、苦しさが、子規の生そのものであったといえよう。

亜浪は、古往今来、夜長の句として、これほどすぐれた句はないといゝ、子規の作句中、最もすぐれた一句と推奨している。

蟋蟀（こほろぎ）や青物市のこぼれ菜に　明治31年

『俳句稿』（明治三十一年）所収。秋、動物に出る。新聞「日本」（明治33・11・26）に「こほろぎ」と題し載る。蟋蟀が三秋の季語。しかし、掲出句は、一句の場景からして、晩秋の風情。

蟋蟀は、『万葉集』にも出ており、当時は虫の総称。今日、蟋蟀と呼んでいるのは、つづれさせ蟋蟀（こほろぎ）のこと。由緒ある鳴く虫である。

近在の農家から生産者が集まりひらかれた青物市。大方は、早朝から昼頃まで。市が立った後にこぼれた菜屑に、しきりに蟋蟀が鳴いている。露けき季節がいちだんと深い。

蟋蟀の句には、鳴き場所への興から詠まれた作がある。句中のきりぎりすは蟋蟀の意。

下駄箱の奥になきけりきりぎりす　明25

刈りのこす草のあたりやきりぎりす　明26

蟋蟀や承塵の辺に声す也　明28

蟋蟀の仏壇の中に鳴出しぬ　明31

右の句と比べるに、掲出句は些細なこぼれ菜への着眼がすぐれ、臨場感がある。

鶏頭に大砲ひゞく日午（まひる）也　明治31年

『俳句稿』（明治三十一年）所収。秋、草に出る。「反省雑誌」（明治31・11）に「秋冬雑詠」と題し載る。

「午後零時」と前書がつく。「日午」とは音読では、にちご。まひる、正午の意。よって、仮に読み仮名を施したものゝ、異見があろう。大砲は、正午の号砲（ドン）である。サイレンが用いられる前、東京の丸の内で、空砲を鳴らして正午の時刻を告げたもの。

「鶏頭」が三秋の季語。

日盛に咲く臙脂色の鶏頭、その肉厚な、ぶざまな鶏冠（とさか）の花に、正午の大砲がドンとひびいたのである。

鶏頭は、いかなる音をも吸収しそうである。が、それが午報の大砲だというのがおもしろい。

「日午也」の表記は、リズムの上でも、一句を漢文調に仕立てゝいる。

この頃の蕣（あさがほ）藍に定まりぬ　明治31年

『俳句稿』（明治三十一年）所収。秋、草に出る。「ホトトギス」第二巻第一号（明治31・10）に載る「朝顔句合」中の一句。表記が「此頃の朝顔」とある。

「蕣」は初秋の季語。蕣は朝顔が通用文字。『万葉集』の昔から、「朝貌の花」として詠まれているが、これはキキョウともムクゲともいう。蕣も木槿（むくげ）が本来の意。「毛詩に、女あり、車を同じうす。その顔（かんばせ）蕣（あさがほ）の花のごとし。愚おもへらく、蕣は朝に栄へ、夕に衰ふ花なり、ゆゑに毛詩の倭訓に、蕣を呼びて朝顔といふ。」（『温故日録』）

別に、朝顔の「〈かほ〉とは美しきことなり。」（『滑稽雑談』）ともいゝ、

江戸初期から「朝花開き、辰の時にしぼむ蔓草なり。」(『改正月令博物筌』)として、定まる。

子規は二十坪ほどの庭前に、朝顔をはじめ、萩、芒、鶏頭、葉鶏頭、桔梗と秋の草花をごたごたと植えている。この草花が、病床六尺にしばられ、身動きできない子規にとって、外の自然へ接する唯一の窓であり、いつの間にか自然の天地そのものとなっている。

「病いよいよつのりて足立たず門を出づる能はざるに至りし今、小園は余が天地にして草花は余が唯一の詩料となりぬ。余をして幾何か獄窓に呻吟するにまさると思はしむる者はこの十歩の地と数種の芳葩とあるがためにほかならず」(「小園の記」)

右の一文に、率直な子規の気持が吐露されている。天地が限定されれば、されるほど、小園に植えられた、かぎられた草花への情愛は、いよいよ繊細に、深くなる。先に掲げた「朝顔句合」は、花の色、赤・白・藍・紺・柿色などの朝顔をとりあげ、さらに、蕾や実のさまを詠み、朝顔のからむ垣、植えられた鉢、松との取り合わせなどへ関心を示し、虚子と碧梧桐の句を合わせ、子規が判詞を書いている。

「この頃の葬」と、無雑作に切り出したいゝ方に、雑念を払い、さっと、朝顔そのものに気を集中した子規の生き方がよく見える。「藍に定まりぬ」とは、事実の嘱目でありながら、そこに、おのずから、病者のさみしさが表白されている。珠玉の小品の一句。

耳糞の蜂になるまで冬籠

明治31年

『俳句稿』(明治三十一年)所収。冬、人事に出る。新聞「日本」(明治32・11・27)に「冬籠」と題し載る。『春夏秋冬』春之部にも採られている。「冬籠」が兼三冬の季語。歌語では、「冬木成」(『万葉集』巻十)の字が当てられ、春にかかる枕詞、草木が雪に埋もれる意であった。「冬木籠」の「木」を略して、冬籠という一説もあるが、俳諧以降、「人の寒を凌ぎて籠居する」(『滑稽雑談』)ことをいうようになる。

年中、病床にあった子規には、冬になると、ことに冬籠の思いが昂じた。冬籠の句は生涯に一七六句と多い。

掲出句は、耳垢が蜂に変わるまで、じっと籠居するという意で、冬籠の無聊を強調したもの。耳糞が蜂になるまでという想像が土俗的で、俳諧味がある。「耳ご(耳垢)がたまるとハチの子になる」(『日本俗信辞典』鈴木棠三、角川書店)という俗言が、九州福岡地方にあるという。子規の郷里、松山でも、そんなことをいったものか。耳糞という語も日常の粗野な語感をそのまゝ一句にとり入れ、大胆である。こういわれると、耳の穴をもつ頭の鉢は、どこか蜂の巣に似ている。そんな想像をして、病床での冬籠を耐えたのである。

侃々(かんかん)も諤々(がくがく)も聞かず冬籠　　明治31年

『俳句稿』(明治三十一年)所収。秋、人事に出る。「鳴雪翁を懐ふ」と前書がつく。

新聞「日本」(明治31・1・13)に「閑人閑語」と題し、鳴雪の俳壇引

退を惜しむ一文を子規が記した文末に掲出句が出る。まず、その一文を次に掲げたい。

「鳴雪翁俗務多きに堪へず、終に俳壇を退く。俳句界此将を失ふ、惜むべし。翁、人に教ふる懇切にして一句一字を説く猶数百言を費す、他の我意を会得するを俟って後に已む。後進を益すること尠からず。しかも斯の若き人の長く俳壇に駆馳するを許さず。人世意の如くならざる概ね此類なり、翁の俳句会に臨むや亦俳句を評すること極めて詳密、苟も人の之に服せざる者ある時は弁難駁撃余力を遺さず。声響屋を揺かし口角沫を飛ばす。疾風起り毛髪竪つの勢あり。少壮の者且つ其勢に恐れて逡巡す。爾後俳句会は猶絶えざるも、翁の声を聞かず。冬枯の感無きにあらず。」

右の文中、鳴雪が俳壇を退く理由となった「俗務多きに堪へず」とは、なにを指したものか具に明らかではない。後述するように、鳴雪自身間もなく、ふたたび「ホトトギス」誌上に作句を発表し、「蕪村句集講義」に復帰している点から推測すると、俳壇引退という表現が大袈裟であったことが知られよう。そこには、子規が鳴雪の心理を忖度した、ほからいのようなものがあったのかもしれない。

鳴雪が、松山出身の子弟のために設けられた常盤会寄宿舎の舎監になったのが明治二十二年（一八八九）であり、以来、十八年間尽力し、四十年（一九〇七）に秋山好古と代っている。その間、三十年ころ、常盤会寄宿舎の新築記念会席上で、一紛争が起った。越智二良によると、こんな経過である。

「すでに卒業した佃一予らが、舎内の文庫に新小説やホトトギスがあったのを指摘して非難したものである。鳴雪は監督として一応陳謝したが、ホトトギスに関しては大いに弁明し、「もしこれをさへ禁ずるくらいならば一切の新聞の閲覧も禁ぜざるべからず。また文学生徒は入舎も許すべからずといふ極端論になり申すべく候」と勝田主計に抗議の書簡を送った。」（『子規と周辺の人々』、和田茂樹編、愛媛文化双書刊行会）鳴雪が、三十年から三十一年にかけて一時俳句を廃したのは、右の一件の責任を負って謹慎したものと、柳原極堂が解しているという。（同掲書、越智二良）

子規のいう「俗務多きに堪へず」とは、極堂の推測のように、以上の一件を念頭において記したものかもしれない。

鳴雪が松山版「ほととぎす」では、創刊号（明治30・1）の巻頭に老梅居漫筆を掲げ、第二号に、「粛山公遺吟」（松山藩第四世松平隠岐守定直の遺吟―注宮坂）、第三号に、「粛山公俳事」などを載せ、募集俳句の選者をつとめていたのが、第四号（明治30・4）になると、突然、次のような広告を掲げて、選者をやめ、誌上から退いてしまう。

「脳部ノ宿疾相勝レス候ニ付当分俳事の評選及贈答ヲ謝シ静養仕候此段辱知ノ諸君ニ謹告ス」

「脳部ノ宿疾」がどんなものか判然としないのみならず、畠中淳が指摘する、「この頃、芭蕉の神格化を極度に嫌って、蕪村をそれにかわって高揚して、新派（日本派・ホトトギス派・根岸派）の拡大をはかった、子規を中心とした若手の動きと、彼等に同調しつつも中年を過ぎた古典派鳴雪の微妙な違い」（『内藤鳴雪』松山子規会）が、気持の上の齟齬として、こんな形であらわれたのではないか。

鳴雪は「脳部ノ宿疾」といゝ、子規は「俗務多きに堪へず」といった表現には、互いに相手を傷つけない配慮がうかがわれる。

掲出句の詠まれた三十一年に、数え年五十二歳の鳴雪と、三十二歳の子規、さらに子規より六、七歳年少の碧梧桐、虚子らとの間には、明治維新以前に自己の形成を終った者と維新の変革とともに自我を確立していった者との差が、性質や趣向に歴然とあらわれるのは、至極当然のことであろう。鳴雪を碧虚二人と反対の位置に立つ者として、

「鳴雪の句趣味を尚ぶ。造語は寧ろ拙なる方ならん。其句清麗なる者明浄なる者多し。新を厭ひ古を好み活動を嫌ひ静止を愛す。長所短所皆個中に存す。」（「明治二十九年の俳句界」、「日本」・明治30・2・21）

と、子規は指摘している。東京の昌平坂学問所での漢籍の勉強やさらに洋学の修学など、漢学を基にした自由主義思想の体得は、鳴雪を包容力ある温厚な人物にしたが、美意識という半ば無意識の感受性を問う次元にあっては、知的であり、固定的な漢学の観念からまぬがれ得ないのであった。

「蕪村句集講義」（「ホトトギス」第二巻第一号・明治31・16）での

朝霜や室の揚屋の納豆汁　蕪村

右の句をめぐり、鳴雪は、「此句は播州室の遊女の事を申しました者で揚屋の如き者へ納豆汁のやうな貧しい者を持って来たのが此句の眼目であります。全く反対した者を二つ寄せては配分が悪い筈ですが、又それが却て善き事もあります。」といゝ、子規は、「私の者は全く違います。此句は朝のけしきであってさすが夜は驕奢をのみ事とする廓も朝は納豆汁のやうな佗びた貧しい者を喰ふて居るといふ趣と思ひます。」といって、両者の句解がはっきりと相違している。鳴雪の知的、空間的、静止的な句解に対し、子規は感覚的、時間的、動的な把握をここがけている。これは、おのずから、両人の性質や趣向をもの語るものであろう。

さて、掲出句の侃々、諤々は四字の成語として用いられることが多い。はばかることなく、正論を堂々と直言することをいう。

前書により、鳴雪翁の、遠慮のない剛直な意見を耳にする折もなく、冬籠るのは、なんともさみしいことよくらいの意。

掲出句の背後に想像される鳴雪をめぐる子規および碧虚ら若手俳人の気持を考えると、どんなに句会や輪講会の場で議論しても、一方の対立者を失うことは、率直にさみしいことである。

柴田宵曲がいうように、「見方によれば、「侃々も諤々も聞かず」の句は、翁の再出廬を希望してゐるものとも解釈出来ぬことも無い。」（『子規居士の周囲』、六甲書房）という一句でもあろうか。

初五文字のすわらでやみぬ海鼠の句　明治31年

『俳句稿』（明治三十一年）所収。冬、動物に出る。初出は新聞「日本」（明治・31・1・13）に「閒人閒話」と題しその巻末に載る。海鼠は近海の岩礁や砂底に棲む棘皮動物。肉が冬うまいので、兼三冬の季語。子規は生涯で三十六句詠んでおり、三十一年には、掲出句の他に、次の二句がある。

海鼠眼なしふくとの面を憎みけり

菩提もと樹にあらず海鼠魚にあらず

右の二句とも、凝った句。苦心したさまがいずれも字余りとなった佶屈句形からうかがわれる。

掲出句の句意は述べる要はないであろうが、右の句が出る「閒人閒話」の一文が句作の苦心談として具体的な句型について、語っているので、おもしろい。次に記す。

「〇紅緑曰く吾俳句を学ぶこと数年、今に於て始めて初五字の置き難きを知る。余が見る所非なるか、如何。答へて曰く吾之を詩人に聞く、初学の人、律詩を作る、多くは力を両聯に用ゐ、起結に至りては僅に字を塡するに止まる、其一歩を進めし者は力を結句に用う、而して力を起〈結〉二句に用うる者に至りては今の詩人多しといへども五指を屈する能はずと。俳句亦豈異なるあらんや。中七字を得て足れりとし初五終五に意を用ゐざる者を下とす。終五文字に推敲を費す者は中なり。子の初五に力を用うる者蓋し其の俳境の進歩を証するに足らんか。」

律詩はいうまでもなく八句で構成され、第三句と第四句、第五句と第六句とが対句をなす。文中の両聯とは対句表現の個所。俳句でいう中七字に相当する。初五を据えるのが、もっとも困難との体験を、魚に似て魚にあらず、摑みづらい棘皮動物の海鼠の一句で語ったところに、子規のユーモアがあろう。

聖堂やひっそりとして鷦鷯（みそさざい）　明治31年

『俳句稿』（明治三十一年）所収。冬、動物に出る。聖堂は孔子を祝った聖廟（せいびょう）のことであるが、こゝは湯島聖堂のことであろう。林羅山の学問所のあった忍が岡に徳川義直が建てた孔子廟先聖殿を、元禄三年（一六九〇）将軍綱吉が神田昌平坂（湯島）に移築したもの。爾来、江戸儒学の学問所として、明治維新を迎え、昌平学校、のち大学校と呼ばれたが、明治四年（一八七二）に文部省が設置されるにともない使命を終っている。

もともと林家の私塾にはじまった昌平黌（しょうへいこう）を、松平定信の朱学以外の異学を禁じた「寛政異学の禁」の改革の折、林家八代を継ぎ大学頭となった林述斎（じゅつさい）（松平乗蘊（のりもり）の三男）が幕府の学問所とする学制改革を断行したもの。これによって、昌平黌は、幕府官立の学校となり、旗本、御家人の子弟教育の場となった。

かつて活況を呈した湯島聖堂もいまやひっそりと静まりかえり、折から冬の日に、鷦鷯があそんでいる。みそさざいは、日本産の最小の鳥、体長六センチほど。初夏には山地の渓流近くの森林にすむが、冬になってと人家の近くにくる。羽は焦茶色で暗い横紋をもつ地味な鳥だが、雄のさえずりが美しい。

みそさざいの語源にして、みそは溝、溝の辺を飛びあるくところから溝鷦鷯（ミソサザイ）（「万葉代匠記」）だとか、ささいはささやかな意、あるいは小さな意（「日本釈名」）などあるが、いずれにしても、目立たない鳥である。

「ひっそりとして」は、上御のや切れを気分としては受けながら、みそさざいの遊んでいる状態をさしたもの。いかめしい、緊張感ある上五音に対し、拍子抜けするような以下十二音の配合がかえって

気持がいい。

初暦五月の中に死ぬ日あり　　明治32年

『俳句稿』（明治三十二年）所収。新年に出る。「所思」と前書がある。翌年一月号の「ホトトギス」（明治33・1）に「新年雑記」と題し掲載。

前書と合わせて、もとより想像句であろうが、病人特有の勘で、五月ごろおれはダメかもしれないと思ったものだろう。たしかに、この年は、元日から発熱。それでも、昨年末に虚子が持参した鴨を隣の陸羯南宅の池に放ち、背負われて見に行っている。一月五日には『蕪村句集』輪講会、八日には子規庵句会を催すが、九日の夜には、元日以来の熱が引かず四十度を越している。以上の容子からいって、想像ではあるが、実感を伴って作ったのだ。

なぜ五月なのか。五月は初夏にあたり気候も暑くなく寒くなく快適。五月晴がつづき、一年でもっとも好まれる月である。ところが、病床の子規にとっては、五月は不安な月とのひそかな思いがあった。多分、それは一昨年（三十年）五月二十八日の体験が気持を支配したのであろう。

その日は『古白遺稿』を刊行した日であるが、熱が八度二三分から九度四五分の間を昇降したので、解熱剤を用いたところ、一時虚脱状態に陥り、五度以下にさがってしまう。翌二十九日になり、容態は回復したものの、又九度五分に上昇する。その日夕方来診した医師は一合余の膿をしぼりとる。子規にとって、一時的ではあるが仮死状態を体験したのである。

このような体験を経ると、病人は五月に怖れを抱くものだ。子規にあっては、死ぬことはなかったものの、五月への怖れが的中することになる。

三十二年五月、病状悪化し、発熱のため不眠に苦しむ。臀部に新しい患部が口を開け、寝返りも不自由となる。毎日繃帯交換が苦痛で、病床に坐る姿勢がとれないので、煩悶する。

一昨年の体験に触れ、伯父大原恒徳に次のような手紙を書く。

「今の処でハまだ一昨年のやうに衰弱不致候へとも此上毎日つゞけさまにやられたら終にハ全く弱り可申候」「毎日繃帯のとりかへにハ大声あげて泣申候」「一切の食物ハやめにして牛乳と果物ばかりに御坐候」（5・12）

右の文言の「毎日つゞけさまにやられたら」とは、発熱のことをいっており、前日十一日は三十九度四分でその前日より高いが、一日二度の発熱が一度になった由。

また国手石井露月宛の手紙では、五月の病状悪化を告げ、今だに寝返り困難でどちらを向いてもどこかに障り、熱も不意に四十度にも上ることがあると記す。「世人は又か」と思うくらいで本人も驚いてはいないが、坐る希望がほとんど絶えたわけで、「すわれぬ程ならば死んだも同じことに候」と嘆く。（6・1）

掲出句の「初暦」は新年の季語であれば、句材に明朗感を伴うのが常套である。それを子規は排し、おのれの予感を端的に記したのだった。

行き過ぎし短き駅や海のどか　明治32年

『俳句稿』（明治三十二年）所収。春、時候に出る。新聞「日本」（明治33・4・13）に「のどか」と題し載る。さらに『春夏秋冬』春之部の「長閑」に分類されている。「のどか」が兼三春の季語。

「行き過ぎし」とは、汽車が停車場に止まらないで行き過ぎた意。海に臨んだ、プラットフォームが短い駅ではこんなことがあったのであろう。平成の今日では考えられないこであるが、鉄道が敷設されて間もない田舎の駅では見られたことではないだろうか。

のどかな海というと、さしずめ、須磨の海辺を想い描く。子規が日清戦役に記者として従軍後の病態を療治したのが須磨の保養院であった。瀬戸内の海を眼下に、須磨公園には、蕪村の「春の海ひねもすのたりのたり哉」の碑が建っている。春の海を一幅の絵に仕立て上げた蕪村に対し、子規の句は、どこかに文明開化の世相とかかわる蕪雑な痕跡をとどめている。蕪雑な些事を愛する以外に、子規の日常はないのである。

接木して椽に橐駝が物語　明治32年

『俳句稿』（明治三十二年）所収。春、人事に出る。初出は、新聞「日本」（明治32・4・17）に「接木」と題し載る。また『春夏秋冬』春之部の「接木」に分類されている。「接木」が仲春の季語。

掲出句は、接木と「橐駝が物語」とのかかわりを明らかにしなければならないが、新聞「日本」紙上の「接木」一連にもこの話は及んでいるようだ。

咨き人の善き柿得たる接木哉

名を得たる接木の親爺雇ひけり

後園の接木を覗く散歩哉

右の「名を得たる」の句は後述したい。

さて、掲出句の「橐駝」とは駱駝のこと。「橐駝が物語」は、柳宗元の「種樹郭橐駝伝」を指す。傴僂病をわずらって、背中にこぶを負い、うつむき歩いている男。ひと呼んで橐駝（らくだ）とあだ名をつけたのであるが、ご本人は、「まことに結構、なるほどうまいもんだ」とご満悦。もとからの名を捨て、みずから橐駝を名のってしまう。変人ではあろうが、そんじょ其処らの御方とは違う。このひとの仕事が植木屋さん。

そこで、橐駝とは植木屋の別名に用いられる。すると、掲出句は、接木をした後、植木屋が茶でも啜りながら縁側でひとくさり講釈をしている場面と解される。また別解として、話している者を私と見てもよい。接木のひと仕事の後、私が植木のコツに関し、柳宗元の「橐駝が物語」から知恵を藉りて話しているのである。

こゝでは前者、主語を植木屋と解しておきたい。少々、植木屋橐駝の名高いひとくさりを紹介する。

橐駝の植えた木は根づきがよいばかりか、大きく繁茂し、実も早く沢山なる。そこで町ではひっぱりだこ。上掲の「名を得たる」の句は、この個所を踏まえた子規の連想であろう。

なぜ、それほど植木名人かというと、植木が天から授かった本来

の性質どおりに栽培し、あとはあれこれ手をかけないからだという。ところが他の植木屋の栽培法は、やり過ぎでなければやり不足。ひとによっては、かわいがりすぎる。朝晩見に行き、撫でさすり、ひどいのになると、皮を爪でひっかいて、枯れてはいないかと調べたり、木を揺すって根のつき具合を心配する。これでは、木の本来の性質から、日々離れてしまうばかり。かわいがっているのが逆に害していることになる。

柳宗元はこゝまで橐駝から話を聴いて、そこでもし君のやり方を政治に適用したらどうだろうかね、うまく行くだろうねと、当時の為政者の法律や命令を次々に出し、人民を縛りつけ、余裕を与えないやり方批判へ、巧みに誘導していくのである。

柳宗元が橐駝が物語で述べたことは『荘子』の無為自然の考え方と同じだ。「夫れ天下を為むる者も、亦奚に以てか馬を牧うに異ならん。亦馬を害する者を去るのみ。」（『荘子』徐無鬼篇）というのである。

子規の句は、右のような内容には触れていないが、季語「接木して」の一語を提示、一切省略した思いは深いとみなければならない。

同時期の作に、こんな句もある。

さかしらの橐駝が妻の接木哉

右の句にしても「さかしら」（利口ぶること）を嫌った子規の本音がうかがわれる。

受付日　一九九三年十一月十六日